

## 地域連携によるメディア教育モデル構築の研究

枡窪優二\*・松山智恵子\*・脇田泰子\*  
小川真理子\*・亀井美穂子\*

Research into a Model for Media Education with Links to the Local Community

Yuji TOCHIKUBO, Chieko MATSUYAMA, Yasuko WAKITA,  
Mariko OGAWA and Mihoko KAMEI

### 1. はじめに

情報通信技術（ICT）の進歩，インターネットの普及，携帯電話の広がり，テレビ放送のデジタル化など，いまメディア教育を取り巻く環境は大きく変化している。こうしたなか本学文化情報学部では平成23年度にメディア情報学科が増設され，新しい時代のメディア情報教育の在り方や方向性を模索している。

メディア情報学科では，「メディア社会」，「メディア行動」，「メディアクリティーク」の3つの学びの領域を軸にしたカリキュラムを採っていて，その教育拠点の一つにメディア棟のテレビスタジオがある。このスタジオはメディア情報学科の増設に合わせて，従来のアナログ設備からデジタル（ハイビジョン対応）設備にリニューアルされ，バランスの取れた効率的な教育用テレビスタジオとして，他大学などの教育機関からも注目されている。このスタジオはテレビ制作・映像ジャーナリズム関連領域の学生指導に活用されているが，メディアを取り巻く社会環境の変化に対応して，いまメディア情報学科の教員有志が映像メディアを軸にした新しい教育モデルの構築に取り組んでいる。これは大学と地域が連携して社会貢献につながる映像作品を企画・制作して，それをインターネットで情報発信し，その過程で学生に質の高い教育を行うと共に，大学が地域に貢献していこうという試みである<sup>1)</sup>。

こうしたスタジオを拠点に大学と地域が連携して取り組むメディア情報・教育プロジェクト（地域連携プロジェクト）は，平成20年度から事前準備を含めて段階的に進めてきたが，メディア情報学科が増設された平成23年度には，映像メディア情報領域の一つの教育モデルとして当初の狙いを達成できる見通しとなった。そこで本稿では，まず教育モデルの狙いや代表的な地域連携プロジェクトについて報告した上で，プロジェクトの内容やその成果を学生や連携先を対象としたアンケート調査，ヒアリング調査をもとに分析・

---

\* 文化情報学部 メディア情報学科

評価し、新しい時代のメディア教育モデル構築に向けた問題点や課題を考察した。

## 2. 教育モデルの狙い

映像制作の実践は、それを通して、学生がどのような学びやコミュニケーション能力を獲得していけるか、という点に於いて、大学教育の場でも近年、新たな研究領域として取り組みが進められている<sup>2)</sup>。他方、地域の魅力を伝えることは、その地域の再発見や活性化につながる大きなきっかけになり得る。この点に着目すると、視覚に訴えかけて地域を語れる質の高い映像作品の企画から制作、発信までを全て、大学で手がけることができるなら、大学は地域社会と極めて有意義な関係を構築していくことが十分に可能である。こうした考えの上に立ち、メディア情報学科では、地元企業や行政との連携に基づき、地域貢献に主眼を置いた映像作品の制作と、インターネットを通じた公開とをセットに、企画プロジェクトを4年前から段階的に立ち上げてきた。以来、何本もの作品を世に送り出してきた。

こうした形での社会貢献の目的は、何と言っても、その教育的価値にある。作品の企画、制作過程を通じて、学生に質の高い、総合的なメディア教育を実践する。卒業研究や少人数による演習ゼミに於いて、きめの細かい課題探求能力の育成指導を施すことにより、職業的自立に不可欠な実力を養っていく。それにより、学士力の確保と就業力の向上という学びの効果の、より確実な実現を目指していく。専門的な映像制作ノウハウだけでなく、スタッフ間、或いは取材先との意志疎通を磨かれることで、社会に出た際に必要なコミュニケーション能力を高めながら、学生たちは完成させた作品を、最後にネット上に公開する。自らも社会に向け、発信する存在であることを強く認識し、発信情報に対する責任の重さを知る。全体を通じて、メディア社会と向き合い、その中で生きていく自覚を体得する貴重な経験をすることになる。大学側としては、映像取材を通じて地域社会を描く確かな視点が求められ、作品のクオリティーを以って、その要求が満たされたという手ごたえを双方が持てた時、地域と大学との間には、揺るぎない信頼関係が構築されるようになる。

このような地元社会の信頼を勝ち得ていくことは、地域に根ざした発展を目指す大学にとって、非常に歓迎すべきことである。多くの連携プロジェクトを通じて、創造性豊かな映像コンテンツを作る。これに必要な指導と実践を受けた学生を世に送り出して実績を挙げることで、映像制作の教育的価値をさらに高めていけるからだ。しかも結果として、より大きな社会貢献にもつながっていく。こうした好循環に支えられて、新たな学生を獲得し、メディア教育を通じて、情報化社会を生き抜いていける人材の育成を図ることが、メディア情報学科最大の目的の一つである。刻一刻、進化していくメディア社会の新しい時代に即して、文字、音声や映像などを駆使したメディア情報の活用と、その制作能力の修得を支援し、発信を通じて、社会と良好なコミュニケーションを図る能力を養成することが、21世紀のメディア情報学科に、何よりも求められている。今回、ここに報告する地域連携型メディア教育モデルのあり方は、その実現に近づける最も有効かつ実践的な手法であり、学科の専門課程の充実にも与するものとして、今後も引続いてその体系的な構築を図っていくべきものである、と考える。

### 3. これまでの取り組み

地域連携プロジェクトの事前準備として科学研究費補助金（平成20～22年度、研究代表者・枋窪優二、研究分担者・亀井美穂子）で映像制作（ノンリニア編集、ハイビジョン撮影と野外ロケ）を総合的に指導する教材ビデオを独自に開発して、シラバスや教育方法などを工夫した<sup>3)</sup>。その上で学生を対象に段階的に映像制作の指導を始め、これまでに取り組んだプロジェクトは表1の通りである。

制作した映像作品は全てハイビジョンで、学生は「卒業研究」（3年後期～4年）と「マルチメディア演習・テレビ制作」（3年前期）を履修する過程でプロジェクトに参加し

表1 地域連携プロジェクトの取り組み

プロジェクト名（連携先）	企画制作した映像コンテンツ
①東山動物園プロジェクト （名古屋市東山動植物園 と中京テレビ放送）	動物園ミニ番組 4分×3本（H20年度） 動物のレストラン 4分×3本（H20～21年度） 動物園の仕事 4分×3本（H20～21年度） ドキュメンタリー「東山動物園物語」19分（H21年度） 情報番組「なるほど！生物多様性」10分（H22年度） 動物園ミニ番組 4分×5本（H22年度） 教育ビデオ「メダカの秘密を探る」5分（H23年度） 教育ビデオ「モルモットふれあい紹介」3分（H23年度・予定） 飼育員の仕事 3分×6本（H23年度・予定）
②中部電力㈱プロジェクト （中部電力株式会社）	デザインの間 広報ビデオ 2分×5本（H21年度） ドキュメンタリー「内ヶ谷の森の輝き」13分（H21年度） デザインの間 広報ビデオ 2分×4本（H23年度・予定）
③星が丘プロジェクト （星が丘テラス、東山遊園地 星ヶ丘の商店など）	情報番組「I love 星ヶ丘」4分×3本（H20年度） ドキュメンタリー「星が丘テラスの舞台裏」23分（H20年度） ドキュメンタリー「輝くイルミネーション」10分（H21年度） 情報番組「東山ボート／ボウリング」3分×2本（H23年度）
④戦争資料館プロジェクト （NPO「ピースあいち」）	ドキュメンタリー「市民が手作りで平和発信」20分（H21年度） 上記作品の英語版 20分（H21年度） ドキュメンタリー「未来に語り継ぐ戦争体験」18分（H22年度） 上記作品の英語版 18分（H22年度）
⑤介助犬プロジェクト （日本介助犬協会）	ドキュメンタリー「介助犬の育つまで」17分（H22年度） 情報番組「介助犬フェスタ2011」4分（H23年度）
⑥劇団四季プロジェクト （劇団四季 名古屋公演本部）	情報番組「劇団四季の魅力～オペラ座の怪人」シリーズ 4分30秒×5本（H21年度）
⑦図書館プロジェクト （名古屋市鶴舞中央図書館）	情報番組「視覚障害者と本をつなぐ～図書館サービス最前線」 10分（H23年度）
⑧高蔵寺プロジェクト （生活科学部・地元NPO）	ドキュメンタリー「宝人たちの挑戦～高蔵寺ニュータウン物語」 27分（H22年度）
⑨科学館プロジェクト （名古屋市科学館）	広報ビデオ「名古屋市科学館てんナビ」シリーズ 4分30秒×6本（H23年度・予定）

た<sup>4)</sup>。作品は大学・学部サイトで動画公開したほか、①動物園、②中部電力、④戦争資料館、⑤介助犬、⑦図書館、⑧高蔵寺は、連携先が Web サイトで独自に（大学サイトへのリンクを含めて）動画公開した。ドキュメンタリー作品 4 本は地元のケーブルテレビで放送された。

#### 4. 東山動物園プロジェクト

東山動物園との連携・協力は平成20年度にスタートして、映像シリーズ制作を含めて 9 つの作品を企画・制作して Web 動画公開するに至っている。作品の内訳は、情報番組が 6 作品（シリーズ）、教育ビデオが 2 作品、ドキュメンタリーが 1 作品である。ここでは平成22年度に制作した動物園ミニ番組（4 分×5 本）と平成23年度に制作した教育ビデオ「メダカの秘密を探る」（5 分）の事例を報告する。このプロジェクトは中京テレビ放送㈱から協力要請があり、完成作品は大学・学部サイト<sup>5)</sup>と動物園サイト<sup>6)</sup>のほかに、中京テレビサイト<sup>7)</sup>でも動画公開している。

##### (1) 平成22年度・動物園ミニ番組シリーズの制作

この作品は学生 4 人が卒業研究作品として 3 年後期の「卒業研究」で制作したものである。作品テーマのなかに取材・撮影が 8 月に限定されるものがあったため、教員（枋窪）と学生が相談して、8 月から自主的に撮影開始する形で制作に取り組んだ。動物園の担当窓口は教育普及主幹（獣医）で、主な制作スケジュールは下記の通りである。

- ・平成22年 7 月に動物園と大学で作品テーマを相談して、①ナイト ZOO & GARDEN、②人とクマの共存、③世界のメダカ館、④ニホンザル舎、⑤アメリカ大陸コーナー、計 5 本の制作を決める。①②はイベント、③④⑤はリニューアルした施設で、①と②はイベント開催に合わせて 8 月に取材、③④⑤は 9 月以降に取材することにした。①②は取材日が迫っていたので、この場で詳細打合せを実施した。
- ・8 月上旬に①を撮影、中京テレビから同社 Web サイトで早く公開したいという希望が寄せられたので、作業を急いで 3 日後に作品を完成させた。
- ・8 月下旬に②を撮影、9 月中旬に編集して、動物園に監修を依頼して、9 月下旬に完成。その時点で動物園との打合せを実施して、それ以降の作品 3 本の取材・撮影日を決めた。
- ・10 月上旬に③、10 月下旬に④、11 月中旬に⑤を取材・撮影して、平成23年 1 月までに予定していた作品 5 本を完成させた。

作品のテーマ、内容、撮影台本の作成、作品の監修（チェック）は下記の形で行った。

- ・作品テーマは動物園側アドバイスをもとに、動物園の意向に沿ったテーマとした。
- ・内容については、事前に打合せをして、学生が撮影台本を作成、それを教員が指導・修正、その撮影台本を動物園が確認・チェックした。動物園ではその撮影台本に対応した取材・撮影の準備とアレンジをした。
- ・撮影時は原則として動物園側と撮影台本の内容について詳細打合せを実施した。そのあと動物園側の取材対応を確認の上で、大学（学生）側が主導する形で撮影した。撮影時は動物園担当者が現場に同行した。1 回の取材・撮影は事前打合せを含めて合計 2 時間

半程度を費やした。

- ・作品がほぼ完成した段階で動物園にインターネットで動画データを送付して、内容の監修を依頼した。最初は誤りや不適切な部分の指摘があったが、後半になったら修正箇所はほとんどなかった。

## (2) 平成23年度・教育ビデオ「メダカの秘密を探る」の制作

この作品はミニ番組シリーズ「③世界のメダカ館」を取材したときに、動物園から提案・依頼があって制作したものである。したがって、この作品は「企画＝東山動物園、制作＝椋山女学園大学」で、大学が動物園と共同で制作した作品である。制作過程の概要は下記の通りである。

- ・撮影台本（案）を動物園が作成し、それを大学（教員）が修正した。
- ・上記の動物園グループ学生が卒業作品（番外編）として制作することになり、平成23年1月下旬に現地で撮影をした。ただし動物園の都合で撮影できないシーンがあった。
- ・4月中旬にラフな暫定版を作成、動物園側が内容を確認した上で、6月上旬に追加撮影し、その作品を動物園側が監修して（修正箇所なし）、大学がDVD版を制作して6月中旬に動物園に寄贈した。

動物園ミニ番組は地域連携による標準的な制作スタイルだが、メダカ館・教育ビデオは動物園の依頼に応じて大学が映像作品を制作したもので、動物園プロジェクトでは初めての共同制作となった。教育ビデオが完成したあと、動物園から新たに「モルモットふれあい紹介ビデオ」の制作依頼があり、9月に撮影を実施して作品を完成させ、DVD版を動物園に寄贈した。大学と東山動物園との新しい形のコラボレーションの形が生まれてきた。



写真1 動物園での取材



写真2 動物園長へのインタビュー

## 5. 中部電力㈱プロジェクト

中部電力㈱とは平成21年度と平成23年度に下記の連携プロジェクトを実施した。

### (1) 平成21年度・「デザインの間」広報ビデオと内ヶ谷ドキュメンタリーの制作

「デザインの間」広報ビデオは、動物園プロジェクト（卒業研究）とは異なり、3年前期の「マルチメディア演習・テレビ制作」（受講生15人）の課題作品として制作した。教



員（栢窪）が演習の課題作品にふさわしいテーマを探していたところ、それに応じる形で中部電力㈱から「広報ビデオを制作してほしい」という希望が寄せられた。学生3人が1グループとなって、グループごとに1つの作品を制作した。

事前に大学と中電で打合せをした上で、1作品＝2分程度の広報ビデオを、テーマ別に合計5本制作することを決めた。打合せをもとに大学側で撮影台本を作成し、それを中電が確認・一部修正したあと、現地で撮影を行った。撮影は5月に計3日間実施して、そのあと編集、音声処理、字幕処理を経て7月上旬に暫定版が仕上がった。中電担当者が作品内容を確認したものに、一部修正を加えて、7月中旬に完成した。この作品は広報ビデオなので、大学サイトでは公開せずに、中部電力「デザインの間」サイト<sup>8)</sup>だけで動画公開した。学生の映像作品が企業の広報ビデオとして活用される最初の作品となった。

この広報ビデオ制作が終了したあと、中部電力㈱環境部から同社が岐阜県郡上市内ヶ谷で取り組んでいる森林保護活動をテーマに作品を制作してほしいという依頼が寄せられた。こちらは広報ビデオを制作した学生の中から希望者4人を募って卒業研究作品として制作した。8月に事前打合せ、9月と10月に現地取材（2日）、11月に中電本店で環境部長へのインタビュー取材を実施、そのあと編集、音声処理、字幕処理をして、1月上旬に暫定版を制作。それを中電側が確認・チェックして、一部修正し、1月下旬に完成した。この作品も同社 Web サイト<sup>9)</sup>で公開されている。

この作品はドキュメンタリーなので、事前にラフな構成案を作成したものの、撮影台本は作成しなかった。構成案に沿って中電が取材のアレンジ、撮影スタッフのアテンド、現地への交通機関（車）の手配をした。撮影台本がないため暫定版の作品が完成するまで、中電側に作品の明確な構成やイメージが伝わっていなかったが、結果的には大学側との認識の違いはなく、完成作品は同社の広報イベント等でも積極的に活用された。

## （2）平成23年度・「デザインの間」リニューアル版広報ビデオの制作

「デザインの間」広報ビデオの制作から2年が経過して、一部の展示コーナーがリニューアルされたのに伴い、中部電力から広報ビデオもリニューアルしたいという希望が寄せられた。そこで平成23年度前期に1本、後期に3本、新しい広報ビデオを制作することにした。前期は前回と同様に「マルチメディア演習・テレビ制作」の課題作品として受講生4人を中心にグループ制作した。後期は卒業研究作品として学生4人がグループ制作した。

前期の制作では、4月に事前打合せをして、それに沿って大学が撮影台本を作成し、そ



写真3 「デザインの間」での撮影



写真4 内ヶ谷の森での取材

れを中電が確認・修正した上で、5月に現地ロケを実施した。今回は広報ビデオ1本の制作なので撮影は1日で完了した。そのあと編集、音声処理、字幕処理をして7月上旬に暫定版が完成、それを中電が確認し、作品の一部を修正して、予定通り7月に作品は完成した。こうした広報ビデオはドキュメンタリーや社会情報系の作品制作と共通する部分も多いが、広告や宣伝、マーケティング、企業広報などの関連分野と関わりが強く、メディア情報学科の幅広い学びの領域を教育実践できる可能性を秘めている。

## 6. Web 情報発信プロジェクト

ここでは、文化情報学部 Web サイトで公開している動画について、そのアクセス状況を含めて報告し、メディア教育モデルの次のステップとして映像コンテンツの活用を目指した「ヴァーチャル東山動植物園」プロジェクトについて述べる。

### (1) 文化情報学部 Web サイトでの動画公開

平成19年12月に学生の制作した映像作品を本学部サイトで動画公開し始めてから、平成23年8月までに58作品が公開されている。開始当初はできあがった作品を新着順に並べて紹介する形式をとっていたが、動画の本数が増えてきたため、平成22年7月に学部サイトをリニューアルした際に、新着順のほかに動画をカテゴリ別に分類してリストアップ可能な形に変更した。動画のカテゴリとその動画数を表2に示す。表2より、動画の内容に応じて複数のカテゴリに登録してあるものもあるため、のべ動画数は73本となっている。

また、地域連携プロジェクトにより制作した番組は、表2より、「地域連携番組」20本と「東山動植物園関連」17本のあわせて37本となり、全体の約64%を占めている。

表2 学部サイトで公開しているカテゴリ別動画数

カテゴリ	動画数
地域連携番組	20
東山動植物園関連	17
キャンパス紹介	12
ドキュメンタリー	9
授業紹介	9
サークル紹介	4
その他	2
のべ動画数	73

### (2) 動画配信の仕様

Web サイトで動画を公開するためには映像を Web ページで扱える形式に変換する必要がある。ハイビジョン映像の画質をある程度保持しつつ、動画配信がスムーズに行えることを考慮し、文化情報学部サイトでは Flash の動画フォーマットである Flash Video（フラッシュビデオ）形式（以下 FLV）での動画配信を行っている。FLV は、YouTube や

Google ビデオ、Yahoo! Video をはじめとした多くの動画共有サイトなどで採用され、HTML における埋め込み動画の形式として広く用いられている。動画の仕様は表 3 に示すとおりである。

表 3 動画仕様

動画フォーマット	FLV (Flash Video)
画面サイズ	480×270 ピクセル
ビデオコーデック	Sorenson Spark / On2VP6
オーディオコーデック	mp3 ステレオ 128kbps
フレームレート	20 fps

FLV 動画を Web ページに動画を埋め込む形で再生可能にするには、再生プレーヤーを使う必要がある。学部サイトでは JWPlayer<sup>10)</sup>を使用し、FLV 動画を Javascript とプラグインソフトである Adobe Flash Player を用いて再生させる仕様になっている。この Player を用いるメリットは、Web ページに動画を埋め込む形で再生ができ、かつ画面全体表示への切替や音量調整が行える機能を持つので、観覧者のニーズの合わせた調整が可能であることである。

### (3) 動画へのアクセス状況

平成 22 年 7 月に学部サイトをリニューアルした際にアクセス解析ツールとして Google Analytics を導入した。Google Analytics は Google が提供する高機能な無料アクセス解析ツールで、サイト全体、及びサイト内のそれぞれのウェブページのページビューや訪問者がサイト内でどのような経路をたどったのかといった基本的な情報や検索キーワードなど様々なデータが得られるため、多くのサイトで採用されているツールである。

ここでは、Google Analytics によって得られたアクセス解析データから学部サイトに公開した各動画のページビュー数について報告する。ページビュー数とは、Web ページが 1 回表示されるごとにカウントされる数で、同じ訪問者がページにアクセスした後でそのページを再ロードした場合や別ページから戻ってきた場合もカウントされる。

表 4 に地域連携プロジェクトにかかわる動画カテゴリの「地域連携番組」と「東山動植物園関連」の動画のうちアクセスの多いものを抜粋し、そのページビュー数を示す。表 4 より、「42 年目！ 宝人たちの挑戦～高蔵寺ニュータウン物語 (27 分)」がページビュー数 2423 と群を抜いてアクセスが多いことがわかる。この映像作品は、読売新聞（平成 23 年 2 月 8 日）、中日新聞（平成 23 年 2 月 13 日）、朝日新聞（平成 23 年 2 月 28 日）で椋山女学園大学の女子大生が高蔵寺ニュータウンを密着取材し制作した映像作品として記事掲載され、学部サイトで動画公開している旨も掲載された。ここで、図 1 に高蔵寺ニュータウンの動画のページビュー数の推移を示す。図 1 より、動画のページビュー数の急増している日と新聞掲載日がほぼ合致していることから、新聞掲載がアクセス数の伸びにつながっていることがわかる。



表4 アクセスの多い動画のページビュー

No.	動画タイトル	公開日	ページ ビュー数
1	42年目！ 宝人たちの挑戦～高蔵寺ニュータウン物語（27分）	H23. 1.21	2423
2	視覚障害者と本をつなぐ～図書館サービス最前線（9分45秒）	H23. 1.21	836
3	介助犬フェスタ2011～人にも動物にもやさしい社会を～（4分10秒）	H23. 7. 7	304
4	映像制作の裏側「デザインの間」篇（5分50秒）	H21. 7.17	177
5	介助犬が育つまで～シンシアの丘訓練物語～（17分30秒）	H22.11.18	144
6	英語版今しか伝えられない！～未来に語り継ぐ戦争体験（17分30秒）	H22. 9.23	118
7	メダカの秘密を探る！～東山動物園メダカ実験～（4分48秒）	H23. 6. 9	103
8	女子大生が観る！劇団四季(3)～オペラ座の怪人・舞台裏～（4分30秒）	H21.12.14	94
9	世界のメダカ館～身近な自然を探る～（4分20秒）	H22.11. 1	89
10	人とクマの共存（3分51秒）	H22. 9. 8	89
11	ニホンザルを間近に観察（3分30秒）	H23. 1.21	77
12	ナイト ZOO & GARDEN（3分22秒）	H22. 9. 8	70
13	アメリカ大陸コーナーの魅力（3分05秒）	H23. 1.21	41

（平成22年7月～平成23年6月30日までのアクセス解析より）

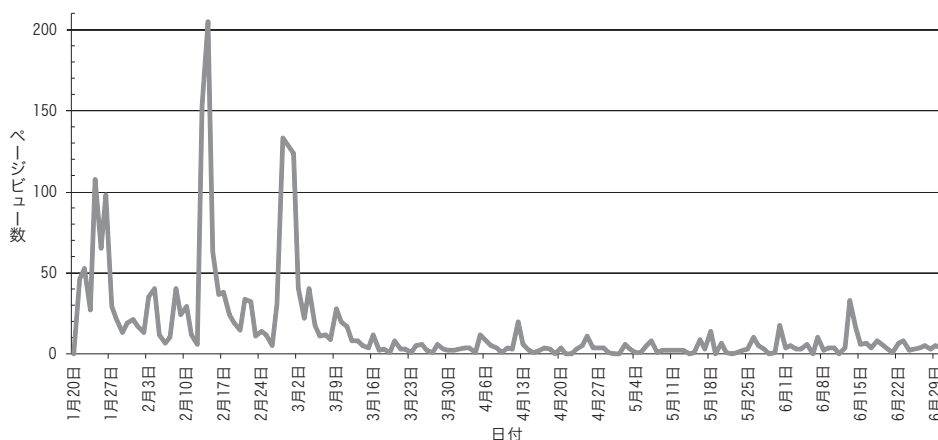


図1 「42年目！ 宝人たちの挑戦～高蔵寺ニュータウン物語」のページビュー数の推移

次に、表4で2番目にページビュー数の多かった「視覚障害者と本をつなぐ～図書館サービス最前線（9分45秒）」のページビュー数の推移を図2に示す。図2より、公開当初の1月下旬から3月上旬にかけては数件程度のアクセスがあったものの、その後の5月中旬ごろまではアクセスが少なかったことがわかる。しかし、5月中旬から6月にかけてアクセスが急増している。これは名古屋市図書館の公式サイトで本学学生が点字文庫の活

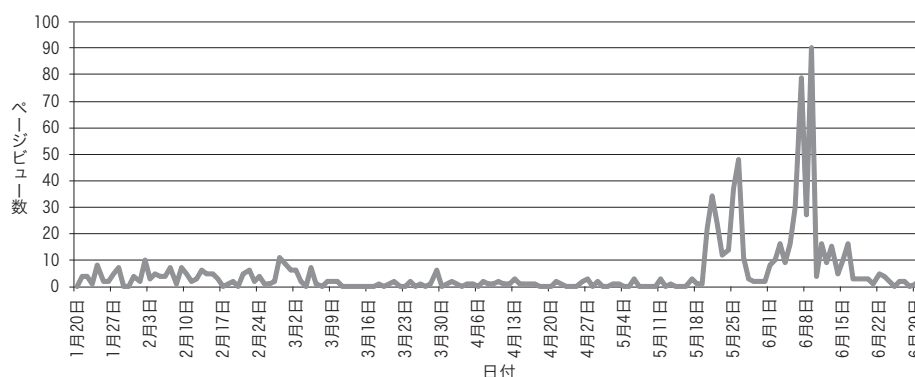


図2 「視覚障害者と本をつなぐ——図書館サービス最前線」ページビュー数の推移

動を取材し、まとめた映像作品として点字文庫のご案内<sup>11)</sup>で学部サイトの動画へリンクをはってもらったことと、名古屋市図書館にこの映像作品をDVDにして寄贈したことを中日新聞（平成23年6月11日）、毎日新聞（平成23年6月11日）、朝日新聞（平成23年6月14日）で記事として掲載されたことがアクセス数の増加に関係していると推測できる。

このように、新聞や連携先のWebサイトなどのメディアで取り上げられることは、学部サイトで公開している動画のアクセス数に大きく関係している。また、Google Analyticsのアクセス解析から参照元（リンク元のページ）を調べてみると、アクセスの多い動画はYahoo! JapanやGoogleなどの検索サイトから参照されているケースも多く、新聞等で興味をもった人が検索して学部サイトへたどり着いていることがわかる。これらのことから、社会や地域にとって関心の深い内容や社会貢献につながる作品の制作は、新聞等のメディアで広報されることによって多くの人に見てもらうことが可能になり、映像制作を軸にした教育モデルとしての意味がより高まることが浮き彫りとなった。

その一方で、表4において、8位以下の動画は平成22年7月20日から平成23年6月30日までのアクセスで100件未満であった。この期間でのアクセス数を平均すると、1ヵ月あたり数件～10件程度のアクセスとなり、あまり多くはない。学部サイトでの動画公開は映像作品の発表の場として大事な役割となっているものの、情報発信という面ではインターネットというメディアを生かし切れていない面があるように思われる。この点を鑑み、地域連携によるメディア教育モデルの次のステップとして、動画コンテンツの活用を含めたWeb情報発信を目指して、ヴァーチャル東山動植物園プロジェクトを実践している。

#### (4) ヴァーチャル東山動植物園プロジェクト

動物園をインターネット上で「ヴァーチャル体験」できる代表的なサイトとして「旭山バーチャル動物園<sup>12)</sup>」が知られているが、コンテンツは写真が中心で、動画の活用が大きな課題となっている。こうしたなか、東山動植物園とは3年前から連携して映像作品の制作に取り組んでいて、すでに多くの映像ライブラリーがあることから、東山動植物園と共同制作する形で「ヴァーチャル東山動植物園」を制作するプロジェクトを開始した。ヴァーチャル東山動植物園サイトの概要と制作過程の概要は下記の通りである。

### 【ヴァーチャル東山動植物園の概要】

- ・東山動植物園をインターネット上で疑似体験できるサイトをめざし、人気施設の動画や写真を紹介して、東山動植物園の魅力をヴァーチャル体験できるようにする。
- ・旭山バーチャル動物園を意識して、それより充実したサイトを制作する。なかでも旭山では活用されていない動画を積極的に活用して、日本一のヴァーチャル動植物園サイトをめざす。
- ・東山動植物園関連の動画コンテンツのほかに、可能ならば名古屋市や星ヶ丘、大学関連の動画なども紹介して、全体に調和する形で地域情報の発信も行っていきたい。

### 【制作日程の概要】

- ・平成22年7月～9月 事前調整、打合せ、Web サイト構成の検討
- ・平成22年9月～平成23年7月 現地での取材・撮影、ヴァーチャル Web サイトの制作、順次コンテンツの追加や更新を実施。
- ・平成23年9月 暫定版の「ヴァーチャル東山動植物園」を公開
- ・平成23年9月～ 暫定版を動物園側が監修して修正
- ・平成24年4月 「ヴァーチャル東山動植物園」(Ver. 1)を公開

現在制作中のサイトは3年後期の「卒業研究」で企画を出し合い、学生が分担してWeb ページの制作を行っている。サイトのデザインは、動画コンテンツをメインに動物園、植物園、施設、レポート番組の分類により紹介する形式をとっている。暫定版サイトのTOP ページと動物園ページを図3に示す。暫定版ではまだ疑似体験できるサイトというよりは、動画のデータベース的なデザインとなっているが、今後の制作では、園内マップからコンテンツ紹介へリンクする形へデザイン修正するなどステップアップしていく予定である。



図3 ヴァーチャル東山動植物園（暫定版）

## 7. プロジェクトの評価

ここでは平成22年度後期の動物園プロジェクト（卒業研究でミニ番組5本制作）と平成23年度前期の中部電力㈱プロジェクト（3年演習科目で「デザインの間」広報ビデオを制作）をモデルに、連携先担当者へのヒアリング調査や学生アンケートなどをもとに、プロジェクトの評価を試みる。

### (1) 完成作品の評価

完成作品のクオリティーは、教員や学生の視点では目標レベルまで達していたと受け止められているが、動物園と中部電力の担当者に完成作品についてヒアリング調査した。結果は表5の通りである。それによると、企画意図、構成、映像、ナレーション、音楽、総合評価の全ての項目で「良い」という回答が寄せられた。プロジェクト連携先の評価であるため完全に客観的なデータとは言い切れない部分もあるが、少なくとも完成した映像作品は一定のクオリティーを維持できたという点で、プロジェクト連携先の求める期待にも充分応えられたことが明確に確認できた。

表5 連携先の完成作品についての評価

質問内容	東山動物園の評価	中部電力㈱の評価
Q 1 企画意図は反映されたか？	はい	はい
Q 2 構成はどうか？	良い	良い
Q 3 映像・カメラワークは？	良い、ただしもっと良い動物の表情もある	まあまあだと思う
Q 4 ナレーションは？	良い	はきはきとしていてわかりやすい
Q 5 音楽は？	良い	良かった
Q 6 総合評価は？	大変良い	良い

### (2) 学生のアンケート調査

地域連携プロジェクトに参加した学生は、こうした教育内容をどのように受け止めているのか、東山動物園プロジェクトと中部電力プロジェクトに参加した学生クラスを対象に調査した。大学・FD委員会の実施した授業アンケート（「マルチメディア演習・テレビ制作」）では、受講生のほとんどが「この授業に満足している」「この授業を履修して良かった」と回答しているので、独自に下記のアンケート調査を実施した。結果は表6の通りである。

こうした結果を総合的に判断すると、地域と連携した映像制作を通して、学生の企画力やコミュニケーション能力、バランス感覚、メディアリテラシー力など、幅広いメディア関連領域の指導が実践できたことが裏付けられた。

### (3) 連携先のヒアリング調査

連携先の東山動植物園と中部電力㈱の担当者に、プロジェクトの進め方などについてヒ

表6 学生対象のアンケート調査結果（回答者24人）

【Q1】 作品を完成させてみて、どのように思いますか？（回答を選択）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の力を発揮できて良かった → 1人</li> <li>・難しかったが、作品を完成させることができて良かった → 22人</li> <li>・思うようにいかず、不満が残った → 1人</li> </ul>
【Q2】 映像制作を通して得られた経験は、今後あなたの生活やメディアへの関わり方に影響を与えますか？（回答を選択）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・はい→24人</li> <li>・いいえ→0人</li> </ul>
【Q3】 映像制作を通して社会との関わりを感じることができたか？（回答を選択）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・はい→22人</li> <li>・いいえ→2人</li> </ul>
【Q4】 Q3「はい」の人は社会とのつながりをどのように感じたか？（回答を自由記述）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・Webで公開されたことで、たくさんの人が私たちの作品を目にして下さった</li> <li>・他の人から制作した作品の感想を言われ、社会貢献になっている、と言われた</li> <li>・取材のときに中京テレビさんと共に東山動植物園を盛り上げていこうと思った</li> <li>・撮影現場での打合せやインタビューをしているときに実感した</li> <li>・地域の人にも撮影やインタビューに参加してもらって、一緒に作品を制作できた</li> <li>・協力してくれた地域の人と皆で制作しているのだという連帯感が高まった</li> <li>・地域や社会に生きる人々のプラスになる情報を発信できたこと</li> <li>・映像メディアを通して、大勢の人とつながりを持つことができた</li> </ul>
【Q5】 作品を制作してみて一番重要だと思ったことは何ですか？（回答を自由記述）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・視聴者の立場になって考えることが大切だと思った</li> <li>・取材先の方とのコミュニケーションが一番重要であると思った</li> <li>・伝えることの軸がぶれないように構成をしっかりすること</li> <li>・グループのチームワークと気持ちが一つでないと良い作品は出来なかった</li> <li>・企画意図や制作の意図は何なのかを常に考えること</li> <li>・作品の全体の流れを頭で理解してイメージすること、それで必要な映像が見えてくる</li> <li>・伝えたいことを明確にして、どのようにしたら相手に伝わりやすいか考えること</li> <li>・作品に対する思い入れ、難しくても苦労しても良い作品を作るのだ、という熱意</li> <li>・人と人との関り合いを大事にすること</li> </ul>

アリング調査した。結果は表7の通りである。

こうした調査結果から、今回の映像制作を軸とした地域連携プロジェクトは、大学だけではなく、地域の行政や企業にも一定のメリットがあることが確認できた。これからさらに連携の輪を広げて、大学と地域とのコラボレーションを発展させられる可能性があることが浮き彫りとなった。



表7 プロジェクト連携先へのヒアリング調査結果

【Q1】台本を大学側が作成して、それを連携先が確認する制作の流れはどうか？	
〈動物園〉	→ 台本作成の作業過程は満足している、台本にきちんとこちら側の意向が反映されていた
〈中部電力〉	→ こちらの時間的な負担が軽減されたのでありがたい
【Q2】取材・撮影に費やす時間はどうか？	
〈動物園〉	→ こちらに配慮して撮影日と撮影時間を組んでくれたので、現場の負担は軽くなって良かった
〈中部電力〉	→ 2時間弱の撮影で短く、客が少ない時間を選んでいただいて、良かった
【Q3】作品1本を1回の撮影で作る制作ペースについては？	
〈動物園〉	→ 撮影のペースは想像より“速い”という印象がある
〈中部電力〉	→ 良い
【Q4】完成した映像作品については？	
〈動物園〉	→ 満足している、当初は広報用の映像作品として企画したが、実際に完成された作品の完成度とクオリティーの高さから、教育ビデオを制作することを新たに企画し、大学側に提案して実現した
〈中部電力〉	→ 満足している、悪い意味ではなく、作品のエンディング（学生の撮影シーン）は学生が制作した作品だという印象を受けた
【Q5】大学とのプロジェクトのメリットや今後の展開については？	
〈動物園〉	→ 映像作品は動物会館や千種区・生涯学習センターのほか再生プロジェクト講習会などで活用している、これからは広報としての映像作品だけでなく教育・教材用の映像作品の制作も希望する、『動物園サポーター』制度の普及のためにも活用したい
〈中部電力〉	→ 中部電力が地元と企業との連動によって機能していると示すことが重要であり、この点を大学とのプロジェクトで強調できるメリットが大きい、今後もプロジェクトを継続したい、このようなコラボレーションを通して『つながっていく』『広がっていく』という状況を作りたい、広報ビデオとしては、プロよりも学生の方が伝わりやすい、学生らしさが良いということもある

## 8. 今後の課題

本稿では、教育モデルの狙いや代表的な地域連携プロジェクトについて報告した上で、プロジェクトの分析や評価を試みた。現時点の調査では、プロジェクトに参加した行政や企業から高い評価が得られ、制作した映像コンテンツは一定のクオリティーを維持できている。教育内容についても参加学生は満足しているようだ。こうしたプロジェクトは、メディア情報学科の完成年度・平成26年度に向けて、教育の質をさらに高めるために有効

に機能することが求められる。教員の視点から現状と課題を考察する。

映像コンテンツの企画・制作は、様々な専門領域から成り立っていて、テレビを見てもニュース、報道、社会情報、スポーツ、ドラマ、バラエティー、CM、教育など様々なジャンルの映像作品が存在する。こうしたなか今回のプロジェクトの特徴は、映像ジャーナリズム教育のなかで、映像制作と情報発信に取り組んでいる点にあると思う<sup>13)</sup>。つまり地域の紹介映像や広報ビデオであってもノンフィクション系作品で、学科で開講されている専門教育科目の延長線上で作品の企画、制作、発信をできることである。この流れで社会派ドキュメンタリーの制作もできるし、学生が市民ジャーナリストとして自ら取材体験することもできる。このことは芸術・デザイン系の大学とは異なる点で、メディア情報学科のコンセプトを生かして、教育の質をさらに高める大きな支えになると考えられる。

またプロジェクトの運営・推進は、スタジオを拠点とする映像メディア関連領域の教員が中心となっているが、Web 情報発信や英語版コンテンツの制作などを通して、情報教育や外国語系の研究室ゼミとの連携も広がっている。高蔵寺ドキュメンタリーは生活科学部村上研究室との共同制作で、作品テーマ音楽では教育学部とのコラボレーションを進めている。今後はさらに学内連携を広げ、教育内容を充実させ、研究環境を整えることが求められる。

これまでのプロジェクトでの取り組みを教員の視点で振り返ると、映像制作を通してコミュニケーション能力や判断力を磨いて、バランス感覚や企画力を養う、優れた教育実践だと思う。しかしながらプロジェクトの教育効果については、現時点では客観的なデータを鋭意、収集中であり、その分析・判断には、もう暫しの猶予を要するのが現状である。今後は地域連携プロジェクトを軸にしたこれまでのモデルを活用した学生教育を体系的に実践し、教育効果を実証的に分析・評価して、より優れた教育モデルとして構築することが求められる。

文化情報学部は一般企業への就職を希望する学生が多いが、地域連携プロジェクトは、学外現場＝実社会に於けるコミュニケーション能力を高める訓練にも寄与している点で、そうした学生のニーズとも合致する部分が確かにある。また少人数ではあるが、テレビ制作の仕事を希望する学生もいる。日本ではマスコミ各社が採用の際に学生の出身学部（学科）を問わないなど、一般論としてはメディア情報専攻が就職面でプラスになる状況にはない。しかしながらプロジェクト参加学生のなかには、人気の東京・大手制作プロダクションに採用される者が相次ぎ、平成22年度も23年度も難関の制作会社の「内定」を堂々と勝ち取っている。本気でテレビ業界をめざす学生にとっては、映像制作現場で様々な作業を通して自分を磨くことができる、他大学では実践できない貴重な教育の場になっているようだ。映像制作を軸とした地域連携プロジェクトは、インターネットでの動画活用がさらに広がるメディア社会のなかで、これからも本格的な活動を展開することにより、一層の正念場を迎えていく。

本研究は科研費（20500852）と梶山女学園研究費助成金（平成22年度[A]と平成23年度[A]）による研究成果の一部である。

### 参考文献

- 1) 栢窪優二, 亀井美穂子 (2010) 「地域連携型メディア教育実践の試み——ハイビジョン映像で情報発信」, 椋山女学園大学文化情報学部紀要, 第9巻第2号, 25-32
- 2) 大杉卓三 (2011) 「大学の地域メディア戦略 映像番組制作による大学の地域貢献」, 中国書店
- 3) 栢窪優二, 亀井美穂子 (2008) 「ノンリニア編集によるハイビジョン番組制作指導の実証的研究」, 第15回日本教育メディア学会年次大会発表論文集, 119-122
- 4) 栢窪優二, 亀井美穂子 (2010) 「デジタル放送時代のメディア教育を探る——映像制作指導の現状と課題」, 椋山女学園大学文化情報学部紀要, 第9巻第1号, 39-47
- 5) 椋山女学園大学 文化情報学部サイト <http://www.ci.sugiyama-u.ac.jp/>
- 6) 名古屋市東山動植物園 Web サイト <http://www.higashiyama.city.nagoya.jp/>
- 7) 中京テレビ Web サイト 「東山動物園に行こう!」 <http://www.ctv.co.jp/>
- 8) 中部電力(株) 「デザインの間」 Web サイト [http://www.chuden.jp/design\\_no\\_ma/](http://www.chuden.jp/design_no_ma/)
- 9) 中部電力(株) Web サイト 「エコランド」 <http://www.chuden.co.jp/>
- 10) LongTail Video JWPlayer <http://www.longtailvideo.com/players/jw-flv-player/>
- 11) 名古屋市図書館 Web サイト 点字文庫 <http://www.library.city.nagoya.jp/guide/tenji.html>
- 12) 旭山バーチャル動物園 Web サイト <http://silverlight.asahiyamazoo-aict.jp/>
- 13) 栢窪優二 (2011) 「インターネット時代の映像メディア研究——地域連携プロジェクトからの報告」, 椋山女学園大学文化情報学部紀要, 第10巻, 61-69